

明治のガス事業（一）：福岡市を中心として

入江，寿紀
西日本鉄道

<https://doi.org/10.15017/13657>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として．9，pp.55-60，1977-12-04．エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：



明治のガス事業(一)

——福岡市を中心として——

入江 寿 紀

目 次

- 一、はじめに
- 二、欧米初期のガス事業
- 三、日本におけるガス事業の創設(以上本号)
- 四、東京ガスの発展と横浜のその後
- 五、英米のガス事業発展
- 六、福岡県における初期のガス事業計画
- 七、博多瓦斯株式会社設立
- 八、博多瓦斯の点火と開業当初の成績
- 九、博多瓦斯の事業拡張
- 一〇、福岡県下のガス会社統出
- 一一、明治末における九州のガス事業統出
- 一二、九州におけるガス事業の特質と経済情勢との関係
- 一三、明治末の日本におけるガス事業の特質
- 一四、わが国ガス事業の系統
- 一五、地方ガス事業の欠陥
- 一六、ガス市営と報償金
- 一七、ガス器具について
- 一八、ガスエンジン

一、はじめに

日本におけるガス事業は、生れ落ちた時から数奇な将来を約束せられていた。それは、後進国として出発し、先進国の仲間入りを唯一の目標としてきた日本の宿命を、一身に背負ってきたように見える。更に一面から言えば、人間の長所と短所を、もつとも明白に表わしたのがガス事業だとも言える。

明治三年(一八七〇)横浜におけるガス街灯建設許可(五年九月点火、後の横浜ガス局)と、同七年(一八七四)十二月東京のガス街灯点火(後東京ガス局より更に東京ガス株式会社)によって始まった日本のガス事業も、御多分に漏れず外国製の機械と外人技師の指導により始まっている。しかしその後日本のガス事業は、二十六年長崎(開業?)、三十一年神戸(設立)、三十八年大阪(開業)、三十九年博多(開業)、同年名古屋(設立)を見ただけだった。

日本経済界は、日露戦争後一時好景気に沸いたが、その反動として明治末に不景気がやってくると、全国的にガス事業が統出するようになる。この現象は、中央の不況に影響されることが少なかった九州では、特に著しかったようだ。この事は、大正に入り第一次世界大戦中の好況時に、原料である石炭価格高騰に圧迫され倒産が続出したことと考え合わせて、興味ある出来事と言わねばならぬ。

また、ガス事業ほど離合、興廃の多い業界もめずらしい。その原因

の一つとして、創立の当初から系統づけられていた事が挙げられるが、この事などもガス事業特有の現象かも知れない。

しかしこれらの特異現象も、内容を詳しく調べてみると、猿真似会社のお粗末経営と言う共通の原因があった事がわかる。

更に、いくつかの会社では、一部の好成績を挙げた会社が喧伝された事や公益事業だと言う事のために、地方自治体との間に報償金や町市営問題が起り、中にはそのため民営計画がつぶされた所も出た。以下日本のガス事業について、福岡市を中心としてまとめて行く訳だが、筆者は、明治・大正を主とする大衆史の研究を念願としているので、この稿も大衆史の中のガス部門として採り上げたいと考える。

また、研究論文としてではなく、一つの史料として事実だけを綴り合わせて行きたいとも考えている。そのためには、できるだけ当時の史料またはそれに近いものを主体にする必要がある。もともと、当時の史料であっても間違いがある。しかしこの間違いは、出来るだけ多くの史料を集めて縦横に並べてみることによってほとんど発見出来ると考えている。

これに対し、後世にまとめられた典拠を示されていない書籍には、「はさみ」と「のり」で作ったり、後世の記憶・伝え聞きだけを使用したものが多いようだ。以下その例を挙げてみよう。

「某書」電車の項に、次の記事がある。「明治二十一年（一八八八）十月に、小田原電気鉄道会社が、神奈川県小田原に走らせたのが、わが国電車開通の元祖である。」どうしてこのような大発見？がされたのかと不思議に思っ、いろいろ調べてみたところ、その経過らしいものを発見した。小田原電気鉄道の営業開始は、明治二十一年十月、ところが、同社は、最初馬車鉄道として開業し、電気鉄道となつて後、最初の開業は当然馬車鉄道の開業日を使用している。ところが「某書」の著者は、社名が電気鉄道であるところから、勝手に馬車を

電車だと断定し、わが国電車開通の元祖に祭り上げたと言う訳だ。

また別の「某書」には、「日本でガス供給がはじまったのは明治三年、横浜にガス局が設けられたのがはじまり。それから明治八年に、東京ガス局ができてから、ガス製造供給事業は全国的に広がった。当初、ガス製造供給は政府事業であったが、（以下略）。「このうち間違いを訂正すると次のようになる。「日本でガス事業が初めて認可されたのは、明治三年、横浜でガス街灯建設が許可されたのが始まり。同事業は、翌四年七月横浜石炭瓦斯製造所を設立、五年九月ガス供給を開始した。爾後横浜第一区町会所経営に変わり、二十五年市営となり横浜ガス局と言われた。」

このような間違いは、市史などにもよく見掛ける。このような間違いがどうして起るかというと、最初に採り上げた「某書」に類する自分勝手な想像の外に、転記の間違いや、聞き書きを内容の検討もせず活字にしたり、それらの書籍からまた「孫引き」や「ひい孫引き」したことから起こっている事が多いようだ。たとえ十冊二十冊の書物に同一の事が書いてあったとしても、そのすべてが間違った最初の本から出ている事も多い。

このような本に何度も出会っていると、いつの間にか当時の「原史料」重点にならざるを得ない。しかし、全部の本がこのようなものだという訳ではない。たとえば「日本鉄道史」など、一々出典は挙げられていないが、正確無比なものもある。

以上のような理由から、以下の本文は、当時の「福岡日日」「福陵新報」および当時の雑誌を主体としてまとめた。その他必要なものについては、後世の著書中正確だと判断されるものをも使用した。なお、繁雑を避けるため、当時の新聞については、必要な時の外出典を省略した。

最後に付け加えておくと、新聞記事についても、信頼性について注

意せねばならぬ点があるが、この事については別の機会に発表するので、ここでは触れない。

以上大きな意図の下に発足した筆者の研究なのだが、史料不足や浅学のために、どの程度その目的を達しただろうか考えると、はなはだ心許ない。先学の方々の具体的御教示をお願いしたい。

二、欧米初期のガス事業

欧米における初期のガス事業については、「平凡社・世界大百科事典」に次のように書かれている。

ガスを初めて実用に供したのはイギリス人W・マードックで、彼は一七九三年（寛政四年）に石炭を蒸焼きにしてガスを取り、これを自宅の照明に用い、一八〇二年（享和二年）には工場の照明に石炭ガスを使用して世人を驚かせた。その後一〇年を経た一八一二年（文化九年）に、世界最初のガス会社（公衆にガスを供給する目的でロンドンに設立された。ついで一八一五年（文化一二年）にパリ、一八一六年（文化一三年）にリヴァプール（英）およびボルテイモア（米）にも創立されてから、ガス事業は急速に進歩し、一八五〇年（嘉永三年）ころには、欧米の主要都市にはほとんど普及するようになった。当時のガスの用途はもっぱら照明用で、石油ランプおよびロウソクの需要を駆逐するまでになった。（以下略）

この欧米のガス使用を日本に紹介した最も古い記録については、筆者は寡聞にして知らない。しかし、万延元年（一八六〇）肥後藩士木村鉄太によって書き残された「航米記」の中に、次の文章がある。なおこの記録は、同年第一回の徳川幕府遣米使節が、米国差し回わしの軍艦ポーハタンに乗って渡米した時、随員として渡米、見聞したことを記録したもので、勝海舟の咸臨丸が、日本人だけで初めて日米間を航海したのもこの時だ。本書は、昭和四十九年三月熊本の青潮社か

ら写真復刻出版されたと言う事を付記しておこう。
十八日晴（万延元年二月。三稚斯島）

○魚油ノ氣

一市中鯨油ノ油ヲ、竈中ニ焼キ、竈ヲ以テ其ノ氣ヲ各家ニ導キ、油灯ニ代フ。之ヲ燃ニ光リ有リ。蠟油ニ勝ルニ幾んど倍ス。其制法大體炭ノ氣ヲ制ニ同ジ。

二十五日（同閏三月。華盛頓）。微栗炎旅館ノ項に

瓦斯灯アリ。燒煤ノ氣ヲ取り、回灯油ニ易ヘ用ユ。是レ亦壁ヨリ長キ銅首ヲ出ス一尺余、次第ニ上リ狀チ鶏首ノ仰ガ如シ。鶏冠ヲ転ス一噴壺ノ如シ。火ヲ鶏口ニ点レバ、燃ホ灯油ニ倍ス。火ヲ消ニ鶏冠ヲ左ニ転ズ。鶏首ハ恒ニ折り返シテ壁ニ付ク。之ヲ暢セバ、五六尺ニ至ル。此レ都下ニ煤氣ヲ制シ、鉄桶ヲ土中ニ埋メ導テ各家ニ及サ令ル者ナリ。

二十六日（同右）の項に、

○街路

一街路甚ダ広壯。中央ヲ車道トス。左右一楓樹ヲ植ユ。我楓ニ似テ葉ノ裏白シ。液ヲ取テ砂糖ヲ制ス可シ。又高灯ヲ植ツ。夜煤氣ヲ焚ク。夜行ニ燭ヲ挑ゲズ路明ナリ。車道ノ両方家ニ傍フ処ヲ人路トス。盤石ヲ排シ方野ノ如シ。

四月二十六日 費爾獨爾費亞志の項に、

○煤炭瓦斯

一煤炭瓦斯ハ即チ燒煤ノ氣ナリ。長庫ノ中ニ鉄竈數十ヲ連ヌ。各々高サ二丈許、広サ一丈余、竈上ヨリ桶ヲ以テ煤氣ヲ他ニ導キ、液ヲ取テ油ヲ制ス。之ヲ煤炭油ト稱シ、亦用ユ可シ。猶煤氣ヲ他ニ導キ、水中ヲ潜ラシメ、其ノ惡臭ヲ濾去リ、之ヲ大鉄桶中ニ貯フ。鉄桶は水中ニ沈ム。煤氣下ヨリ充ニ從テ浮出ル一丈許。又桶ヲ継ギ、街衢（まちのこと）ノ土地ニ埋テ各家ニ達セ令ム。之ヲ焚キ灯油（ニ

脱力)易へ用ユ。此ノ氣肺藏ニ害アリ。瓦斯灯ヲ滅ニ氣ヲ漏ザラシム可シ。此ノ氣室中ニ鬱レバ人或ハ斃テアリ。英吉利(イギリス)ノ竜動ハ、煤氣ヲ用テ他邦に勝ル。故ニ肺疾ヲ憂ル者殊ニ多ト云フ。また、「明治事物起原」に、「医博三宅秀の話に」として次の記事がある。

私が仏国へ往った時(文久三―一八六三)亥年十一月横浜出帆)、あちらで瓦斯は、既に灯火用として広く使はれてあつたが、また、マンテルの発明が無かつたので、火焰其まゝ裸火で、光力も今ほど強くなく、越後七不思議の一にある「燃ゆる井」の火に似たものであつた。電氣を動力としては、使つて居たが、まだ電灯は無かつた(以下略)。

その外「明治文化全集」所収「航海新説」巻之下・慶応二年(一八六六)十二月二十六日「竜動新報」の項にも、「街中左右俄斯灯アリ。路ヲ照セリ」と簡単に紹介されている。

これらの記録からも分かるように、当時先進的な考えを持っていた日本人も、欧米の政治、軍事には関心を持っていたが、科学方面に興味を抱いた人は少なかつたらしく、医博三宅秀も、「私の洋行前に、色々の人が米国や欧羅巴に往かれたが、多くは政治方面に注意して、科学の方面に視察を専らにする人が無かつたので、瓦斯や電氣の応用法を、早く伝へなかつたのは、惜い事であつた。」と言っている。

この点、木村鉄太の記録は貴重なものだと思う。

後日本では、石油ランプのことも「ガス灯」と言っているが、この名称の起りは、最初日本に紹介されたのがガス灯だったので、石油ランプが使用されるようになって、舶来(外国から品物が渡来してくること)と言う意味も込めて、「ガス灯」と称したものではなからうか。

三、日本におけるガス事業の創設

「明治事物起原」には、「医博三宅秀の話に」として、

ガスに就て、余り世間の人の知らないことが有る。それは、本所亀井戸の天神橋を渡らずに左へ少し往つて、天神のうら門の真向ふに、南部藩の島立甫という医者があつて、その人が、柱に竹管を取付けて瓦斯に点火して居った。当時ゴム管や鉛管は得難いので、細い篠竹の節をぬき、点火する火口の処だけ金属を用ひて点火した、と思ふ。子供の時、面白いものがあるというて、私は度々觀に往つた。年代は判然しないが、寛政の大地震の前かと思ふ。

と書かれている。

同書によれば、安政(一八五四―六〇)版の「江戸切絵図」には、天神社の川向いに「巴麻油焼炭所」とあり、巴麻油は巴麻油(本来は木材から造つたテールメチルアルコールのこと)の誤字であつて、コールタール、すなわち船に塗るに必要な塗料のこと、焼炭とは骸炭のこと、だといひ、島立甫が製造し石炭油コールタールに巴麻油と名づけて発売していたのだと、「宇津宮氏経歴談」を引いて説明している。

この装置は、水戸の反射炉の構外にあつたものを、宇津宮氏が見てそれに多少改良を加え、島立甫に手伝つて造つたというから、当時反射炉を造つた他の藩でも製造しているかもしれない。

以上のような記録は残っているが、当時はまだ欧米でも、ガスは裸火で使つていた時代で、日本でガスを灯火に使用する人はほとんどいなかった。

日本で最初にガス供給事業が開始されたのは、横浜らしい。試みに東京堂の「明治世相編年辞典」を開いてみると、次のように書かれている。

ガス灯 (明治五年) 九月二十九日、横浜大江橋より馬車道・本

町通りにかけて十六燭光の街灯を道路の両側に点火した。

わが国最初のガス灯。この工事は、高島嘉右衛門（吞象。易者。

一八三二〜一九一四）らの日本社中が、ドイツ領事シュルツの経営するシュルツ・ライス商会と争って権利を得、スイス領事ブレンドルトの世話で、上海のガス灯を建設したフランス技師ペレグレンを雇い入れ、機械設備はスイス領事を経て購入、四年二月伊勢山下の花咲町五丁目の石炭庫跡にガス工場を建設して五年九月一日に落成したのであった。（中略）当時、老人はキシタンの魔法とか、匂いとかぐと即死するなどといって袖を鼻にあてたという。

なお、右文に追加すると、事業許可は明治三年（一八七〇）十月「工業之大日本、明治四三・一一・一号」、四年二月は建設着工（明治二六刊、明治政史）（明治文化全集所収）となっている。

その後の同事業の変遷を、「工業之大日本」同右号から転記すると、次のようになっている。

明治八年（一八七五）七月横浜瓦斯社を横浜第一区町会所に於て買収し、公共事業とし瓦斯局と改称し、統十二年（一八七九）九月同町会所は瓦斯局事業を本町外十三ヶ町に引継ぎ、其後市制の施行と共に、当市（横浜）は二十五年（一八九二）四月同町より譲受け、特別経済を以て今日（明治四三）に至れり。

横浜に次いで点火したのは神戸らしいが、これについては河出の「日本歴史大辞典」から引用しよう。

神戸では、（七二年（明治五年）五月に神戸居住の外人が兵庫ガス商会を設立しようとしたが許可されなかった。）兵庫ガス商会が不許可となったのち、内外人の共同事業として瓦斯商会を設立、七四年（明治七年）一月から居留地にガス灯を点火した。その後、居留地外にもガスの供給を企てたが、許可されず、九八年（明治三十一年）神戸瓦斯株式会社が設立されるにおよんで、一九〇六年（明治

三九年）それを買収された。

次に東京でガスが点火されているが、以下の文は、「工業之大日本」明治四三・二・一号に掲載された「東京瓦斯株式会社」の記事中関係部分である。

明治四年（一八七一）二月、時の東京府権知事由利公正氏（由利子爵）が瓦斯灯を市内に建設するの第一歩として、先づ浅草吉原遊廓に試用せんとし、市の共有金を支出し高島嘉右衛門氏をして英京倫敦より瓦斯機械を輸入せしめしも、事断新（斬新の誤り？）。きわめて新しい事に属し未だ着手するに至らずして、機械は空しく深川倉庫に死蔵せられしこと三ヶ年になりしが、明治六年（一八七三）時代の要求に伴ひ、東京会議所に於て再び瓦斯街灯の建設を議し、同（翌の誤り？）年十二月始めて点火せり。是れ実に東京に於ける瓦斯事業の起原なりとす。

翌年渋沢氏会議所に入りて行務を総理し、会議所は後ち明治八年（九の誤り？）五月東京府庁内に移ると共に、瓦斯局亦庁内に新設せられ、渋沢氏其事務長（後に局長と改称）たり。

瓦斯事業創設より明治九年に至るの間に瓦斯事業に支出したる金額十七万余円、一ヶ月引用の容量其当時にて五万八千八百立方呎なりしが、其翌年に至りては一ヶ月十一万立方呎余を算せり。其需用者の数は驚くべき僅少にして、同年十二月に於て僅かに十九戸のみなりき。同年一ヶ月二百五十万立方呎の製造力を有する瓦斯製造器械を、技師和蘭人ペレ・グレン氏の手により英国より四万三千元にて取寄せ、いよ／＼事業を拡張し、需要者の数も明治十四年（一八八一）には二百二十二戸に上りたり。

是より先き、瓦斯局払下の議一部に起りしも、渋沢瓦斯局長は未だ其時機にあらずとし、鋭意業務の振興を図られしが、明治十八年（一八八五）に至り、瓦斯局公売の案を具して、知事芳川顯正氏に

最早瓦斯局の殖益も相当の域に進み此上は早く民業に移して法制の束縛を脱し益々業務の拡張を謀らしむべしと陳情したり。其結果同年十月遂に瓦斯局は払受人総代沢沢栄一・藤本精一両氏の手に売却せられ、払受人は二十七万円の資本を以て一会社を起しここに事業を承継したり。今日の東京瓦斯会社即ち是なり。

当時本社を芝浜崎町に置き、沢沢氏委員長たり。藤本氏検査掛となり、笹瀬元明氏支配人の事を行へり。而して、成立の初に於ける需要者の数は三百四十三戸、灯数六千六百七十八、街灯四百基、瓦斯管延長十一哩六十二鎖、一日の瓦斯需要高平均七万五千五百立方呎にして、今日より之を觀れば、舊に雲泥の差のみにあらずと雖も、其當時に在ては実に機関の全力を尽せしに相違なし。

以上述べたように、明治の初めに、横浜・神戸・東京と相繼いで開始されたガス事業も、明治二十六年（一八九三）長崎でガス供給事業が始められるまで、日本に新しいガス事業は現れなかった。

佐賀新聞大正期炭坑記事(Ⅳ)

町田保次

大正三年七月二十二日 九管主要駅収入

九州鐵道管理局における大正二年度（本年三月迄）の運輸収入は合計一七、七五七、〇四二円五七錢にして、前年度に比し二、〇六三、九三三円を増加せり。内旅客収入六、六二九、三一〇円六九錢、石炭収入六、七七二、一九一円二二錢、普通貨物収入四、三五五、五四〇円六六錢なるが、今一〇万円以上の収入を受けたる各駅中本県内の分を示せば左の如し。△印は収入減を示せるものなり。

駅名	収入高	乗車人員
佐賀	二七二、四八八円	四六四、三一七人
相知	△一九五、八〇七	一〇四、二八七
山本	△一八〇、六七一	九五、六八八
武雄	一一二、八一二	一九三、四二九
北方	一〇四、六五四	八五、二〇二

大正三年七月二十二日 老婆の縊死

東松浦郡厳木村本山貝島炭坑内居住崎ギン（七〇）は夫伊八死亡後杖とも柱とも思える実子敬吉が近来兩足共歩行できず、且つ身体衰弱し起居不自由なるを痛く心配し、去る十八日午後七時半頃自宅に於て遂に縊死をとげたりと。

大正三年七月二十四日 補充兵の告発

杵島郡北方村志久杵島炭坑在住の福岡県八女郡北川内村久原大

（七三頁へつづく）